

モンゴル相撲の現状に関する覚書

八木橋伸浩

はじめに

相撲に興味を持つようになってすでに20年ほどが経過したが、終着点に向けた目論見はあってもほとんどまともでないまま、今日に至っている。奄美大島の豊年祭でみた相撲をきっかけに、沖縄の角力と大和式の相撲を比較するようになり、さらに興味関心は韓国・台湾へと広がっていった。そして、アジアのなかで相撲はどのように位置づけられるのかという課題のもと、日本の大相撲で現在これほどの隆盛をみせているモンゴル力士の背景についても確認してみたいと考えるようになった。

そこで、2013年2月、モンゴル国の首都ウランバートルに赴いたのであるが、季節的に大変な極寒の時期であること、最大の相撲の祭典は夏のナーダム祭であることから、夏季の追跡調査を行なったうえでその現状報告をするつもりでいた。しかし、なかなか調査日程が組めないまま、いたずらに時間だけが過ぎていく現状を鑑み、まだ調査の途中段階であることを明記したうえで文字化しておくことにした。

いまだ未確認の事項や再確認すべき事項が残ったままのフィールドノートが手元にあるばかりの状態ではあるが、再訪して調査を実施するためのファウンデーションとして記録に残しておきたいと考えた次第である。覚書としたのもそのためである。

したがって、記述内容に不備が生じる可能性も否定できないが、認識違いや不足点に関しては今後、稿を重ねるなかで修正したい。各方面から忌憚のないご意見ご教示を賜りたい。

1. モンゴル国の概要

まず、調査地であるモンゴル国について、簡単に触れておく。

モンゴルの正式国名はモンゴル国(モンゴル・オルス)で、モンゴルは民族名、オルスは国を意味する。19世紀は清朝の支配下にあったが、1911年に清朝から独立。



写真1 極寒のウランバートル市



写真2 市内にはゲルも混在する



写真3 ウランバートル市内の様子

1924年には人民共和国となって社会主義路線を取るようになったが、1992年に社会主義を放棄しモンゴル国(※以下、本稿ではモンゴルの通称を用いる)となり現在に至っている。なお、広大な国土を有し、日本の歴史



図 モンゴル国の位置 (外務省ホームページより転載)⁽¹⁾

とも関係の深いモンゴルの歴史や対外関係史の詳細に関しては本稿では省略する。

現在のモンゴルの行政単位は、首都のあるウランバートル市(※以下、本稿ではウランバートルと記す)の他、21の県(アイマク)、県下には347の郡(ソム)、さらに郡下には1,681の村(バグ)が配置されている。2014年現在の人口はおよそ300万人で、首都ウランバートルにはその約4割強の136万人が一極集中し(写真1～3)、各郡の人口は3,000人程度といわれている。

地理的には、北はロシア、南は中国に挟まれた位置にあり、東アジアの北西部に位置する面積156万平方キロメートル強の国である(図参照)。国土の西には標高4,000メートル級のアルタイ山脈と標高3,500メートル級のハンガイ山脈が展開し、東には標高1,000～1,500メートルの高原、北東には針葉樹林、南にはゴビ砂漠が広がる。国土の5分の4を牧草地として利用する草原が占めており、その環境下で営まれる遊牧民の生活形態や移動式住居ゲル、馬乳酒などは日本でもよく知られている。

国民の多くはモンゴル系のハルハ族で占められ、歴史的な関係性からもチベット仏教が主たる信仰となっている。

2. モンゴル相撲について

【モンゴル相撲の呼称および研究成果】

モンゴルでは相撲を一般的にブフと呼ぶ。モンゴルではハルハ・ブフと呼称するのに対して、中国の内モンゴルではウジュムチン・ブフと呼称される。

本稿においても、相撲を表現するにあたり現地で使用

される呼称であるブフを用いるべきとも考えたが、日本語と組み合わせた場合など表記的に違和感をともなう場合が少なくないため、基本的には「相撲」の表記で統一し、必要に応じて「ブフ」と表記することにした。この点に関しては、今後稿を重ねつつ検討していきたい。

さて、モンゴルで行なわれる相撲は、日本では一般的にモンゴル相撲と呼ばれている。現在の日本の大相撲で活躍する力士には、横綱をはじめとして多数のモンゴル力士がおり、日本人力士の横綱待望論は常に話題になる。しかし、彼らモンゴル人の生活についてはゲルと呼ばれる移動式住居、遊牧民としての歴史など、特化された部分しか私たちはほとんど認識していない。モンゴル相撲についても、その存在は認識していても、その競技形態、文化的背景などについてはほぼ無知といっても過言ではない。また、そうした内容を記した文献等も一般的にはほとんど目にする機会すらないのが現状といえよう。

そこで本稿では、2000年に日本国籍を取得し、モンゴル相撲の文化人類学的研究を進めているバー・ボルドー氏(日本名:富川力道、内モンゴル・シリントグ盟西スニット出身)が自らのホームページに掲載しているブフ(モンゴル相撲)概説の記載「ブフ(モンゴル相撲)概説」ならびに「ブフの分類」⁽²⁾「モンゴル相撲『ブフ』の二大主流比較(2004年6月)」⁽⁴⁾をもとに、モンゴル相撲の概要を整理しておきたい。

【ブフの形態差】

ボルドー氏は大変広範な地域に分布するモンゴル民族の特徴として、方言や風俗習慣などに地域差があることを指摘したうえで、ブフの形態にも同様に地域差が存在しているとしている。同氏による「ブフの分類」によれば、ブフは大きく立合型と組合型に大別され、モンゴルでは主流である立合型ハルハ系列のハルハ・ブフと、同国西部で行なわれている組合型オイラート系列のボホ・ノーロルドンの2種類がある。ハルハ系とはモンゴル人の中心民族であるハルハ族を意味するものと思われる。同氏はブフを計7形態に分類しているが、その形態差の一例として、モンゴルのハルハ・ブフでは威容を誇る鷹の舞が、内モンゴルのウジュムチン・ブフでは勇壮なライオンの跳躍での入場スタイルが、さらに、オイラート・モンゴルのボホ・ノーロルドンでは種牡牛の角突きを模した古典的なスタイルが認められるとしている。

【身体表現と象徴性】

一方、いずれのブフにおいても共通する身体表現があり、ボルドー氏によれば、そこには、「猛禽や猛獣、強



写真4 モンゴル相撲で着用するゾドグとショーダグ
(相撲会館にて)

いいイメージのある種畜（種馬，種駱駝，種牛）の動きをかたどったものが多く，伝統的な遊牧，牧畜の生業形態との密接な関係⁽⁵⁾を窺うことができるという。また，「ブフは古来信仰されてきたシャマニズムとも深く関わっており，祭祀における力士の身体表現は神霊ないしその憑依として認知される場合が多い⁽⁶⁾」と同氏は指摘している。このため，一般的に力士の身体自体に効験があると信じられており，「シャマニズムの最高神としてのテンゲルに『～ブフ』（力士）の名前を持つ天神がいることから力士はきわめて特別な存在⁽⁷⁾」であることがわかるという。しかし，ブフという競技が近代スポーツへと脱皮していくにしたがい，そのような「象徴的意味と儀礼性が次第に失われてきているのも事実⁽⁸⁾」であるが，「土地神を祀る宗教的行事・オボ祭りでは依然としてその原型は残されている⁽⁸⁾」という。

【衣装，勝敗ルール，所作】

ボルドー氏作成の「モンゴル相撲『ブフ』の二大主流比較」表をもとに，モンゴルのハルハ・ブフに限定して，その特徴的な衣装や勝敗ルール，所作を紹介しておく。

衣装は，帽子，ゾドグ（長袖のチョッキ／絹製あるいはナイロン製），ショーダグ（パンツ），ゴダル（ブーツ）からなる（写真4）。

勝敗は，肘・膝・頭・背中⁽⁹⁾のいずれかが地面につけば負けとなる。平手を地面につくだけでは負けにならず，また，土俵がないため，寄り切りなどの技は存在せず，投げや足技が中心となる。相手の足取りも可能。技の種類は600種類ともいわれており，実に多彩である。体重による級別はなく，近年は取り組みに時間制限が設けられている。対戦相手の決め方は2002年までは3回戦以降は全取り組みが指名制だったが，2003年からは称号を有している力士は1，2，4，6回戦以外是对戦相手を目指

名できるように変化しているという。

力士の儀礼的所作の特徴としては鷹の舞が有名だが，その際，胸は獅子を，両手は鷹の羽ばたきをイメージしている。3，5，7回戦では称号のある力士をこの所作で讃えるという。また，取り組み中には力士の脱いだ衣装の襟を捻る所作，決勝戦の際には東西の介添人が一斉になだれ落ちる所作を行なう。そして勝者はイデー（食物類）を観客にまく。

【力士の称号】

国を単位で開催されるナーダム祭の場合は参加者512人によるトーナメント戦となるが，16位以内はナチン（隼），8位以内はハルツガ（大鷹），4位以内はザーン（象），準優勝にはガルディー（ガルダ），優勝にはアルスラン（獅子）の称号が与えられる。

さらに2回の優勝者にはアヴァラガ（巨人）の称号が授与され，アヴァラガがさらに優勝し続けると，さらなる飾り称号が与えられる。

【介添人】

1人の力士にはそれぞれ行司役のザソール（介添人）がつく。ザソールは取り組み中に自分側の力士に助言することが可能で，ボルドー氏はセコンドに近い存在としている。

【ブフ同士の交流】

ハルハ・ブフとウジュムチン・ブフでは，衣装も異なれば，勝敗を決するルールも異なっている。例えば，ウジュムチン・ブフの場合は，足の裏以外の部位が地面に付けば負けとなり，相手の足を取ることは禁じられている。また，ハルハ・ブフのような称号のシステムもない。それ以外にも形態差があり，ブフ同士が交流し対戦を行なうためには，あらかじめルールを決めなければならない状況がある。ボルドー氏によれば，近年では両地域のブフ交流が進んでおり，ホームグラウンドによってルールを決めているという。

【ブフの変容】

モンゴルでは1997年より「ブフ・リーグ」が発足し，有力企業によるブフ倶楽部が急増し，セミプロの力士が出現していることから，ボルドー氏はブフの商業化が進みつつあることを指摘している。

一方，ウジュムチン・ブフは1978年から近代スポーツ化を図るための改革を継続的に実施し，現在では内モンゴルという地域を超えて全国および国際試合を開催するようになってきているという。さらに1999年からは賞金制度が導入されている。

こうした状況をうけ，モンゴル・ブフは現在，近代ス

スポーツとしての新しい道を歩みはじめているというのがボルドー氏の見解である。

3. モンゴル相撲に関する現地の一般的認識

【30才代女性ガイドの相撲認識】

筆者がチンギスハーン空港に到着したのは2013年2月18日、日本時間の22時45分であった。外気温はマイナス20度超。空港からホテルまでのガイドを担当してくれたのは、静岡の高校に留学し卒業したという30才代の女性であった。

ガイド氏から聞いたモンゴル相撲に関するモンゴル国民の一般的な理解の概要は下記のようなものである。

モンゴルの男性すべてがみな相撲を取るわけではなく、それは日本と同じだという。もちろん小さいころからやる人もいる。ただ、基本的にモンゴル人はみな相撲が好きとのことであった。相撲が行なわれる機会はナーダム祭、旧正月、独立記念日など。ナーダム祭は草原（屋根なしの競技場）、旧正月（2月4～11日）は室内で行なう。

力士は帽子、チョッキ、パンツ、靴を必ず身につける。チョッキは胸をあけたかたちのもの。これは、昔、優勝した者が実は女性だったことがあり、それ以来、チョッキの胸をあけたスタイルになったという伝承があるという。

勝負の判断は、肘、膝、背中が地面につくと負け。技は600種類もあると聞いている。大会での勝ち数や優勝した回数によって、虎、獅子、象などの動物の称号を与えられる。

相撲の名前が付いた記念館が滞在するホテル近くにあるが、展示物はない。普段は別の催し物などにも使用されているとのことであった。

【モンゴル人男性の相撲認識】

到着した翌日2月19日には、本学の永井悦子教授のご主人永井匠氏（モンゴル研究者／神奈川大学講師）の知人でモンゴル国立大学で歴史学の教鞭をとられているオヨンジャルガル女史と電話連絡を取り、女史のご主人であるアムガランドルジ氏（1976年生まれ、37才）が通訳として各所に同行してくれることになった。オヨンジャルガル女史は日本の東北大学で博士の学位を取得した方で、ご主人のアムガランドルジ氏も女史と同様、東北大学への留学経験があり日本語が堪能である。女史の父親オチル同大学教授もモンゴル歴史博物館館長などを歴任したモンゴルを代表する歴史研究者である。アムガ

ランドルジ氏の大変親切な仲介により、氏の同級生や知人で現役としてモンゴル相撲を取っている方、公的組織であるモンゴル相撲協会の方とのインタビューが可能となった。さらに、青山学院大学への留学経験もちチェスのプロを目指している氏の弟アムガランバートル氏も調査に同行してくれることになった。なお、アムガランドルジ氏は通称アムガー、日本との合弁会社である鉱山会社LUCERO COL.LTDのスタッフであり、仕事の合間に時間を作って対応していただいた。

アムガランドルジ氏自身は小さいころに相撲を取った経験があるのみである。都会では若者は今、相撲に興味がなくなくなって、やる者は少ないという。実際に筆者がウランバートルの街中を散策した限りでは、市内には細身でスタイリッシュな若者が多く、相撲をするような体型の人は中高年者の方が多いという印象であった。しかし、他に娯楽らしい娯楽がない地方ではまだまだ相撲は盛んであり、男はみな小さいころから相撲に親しむのがふつうだという。

モンゴルの全人口（約300万人）の4割強が首都ウランバートルに居住しており、人口比から考えれば、日本の大相撲でモンゴル力士が非常に多く活躍している事実には氏自身、不思議な感じがするという。ウランバートルでは毎週末の土・日曜日に相撲の大会が開かれており、参加するのは若い人が中心とのこと。そして、金曜日には毎週、試合前のトレーニングが行なわれており、氏の同級生もこれに参加しているとのことであった。

モンゴル相撲の大会として500人規模が参加するのは国のナーダム祭、旧正月、革命の○周年記念日（1921年から）などである。国クラス、県クラス、郡クラスの別があり、このクラスごとに横綱などの称号を持つ者がいる。大規模な大会には、こうした3つのクラスから参加者が集められるという。

氏の同級生も含め、多くの人は仕事のかたわら相撲を取るアマチュアだが、企業からスポンサー資金を獲得し、企業の名前を名乗るようなセミプロも存在している。同級生は自分で会社を興した社長だが、県クラスの大関といったランクに位置づけられていて、個人的なスポンサーも持っている。年1回1,000人規模の大会があり、そこで国のチャンピオンが決まる。これは大変な名誉であり、優勝者にはスポンサーもつくとのことであった。

4. モンゴル相撲協会要人からの聞き取り調査

ウランバートル市内にある相撲会館において、モンゴ



写真5 相撲会館



写真6 相撲順位の称号となる動物

ル相撲協会で要職に就くB. ツォグトバートル氏に時間を作っていただき、お話を伺うことができた。

【相撲会館】

モンゴル相撲の象徴である相撲会館の建物は古く、正面にはモンゴルの国章とナーダム祭の相撲大会における順位の序列を示すシンボルの獅子、ガルダ、象、大鷹を刻んだ紋章が刻まれている（写真5, 6）。相撲会館は国民からの援助金で建設された施設である。

相撲会館の館内にはモンゴル相撲の物品を扱うショップもあり、モンゴル相撲を取る際に着用する着衣やトレーニングウェアなどが販売されていた。着衣は安価なものから非常に高価なものまであり、値段の違いは材質や刺繍の有無などによっている。また、同店にはモンゴル相撲に関する書籍、ナーダム祭の過去の記録を記した書籍、モンゴル相撲のカレンダーなども販売されているが、すべてモンゴル語で記されており、英語版はなかった。モンゴル語を理解できない筆者には悔しい状況であった。また、会館の出入口近くにはプロテインの販売コーナーもあり、相撲を取る人たちの立派な体躯を支える一側面をみた思いがした。

【モンゴル相撲協会】

モンゴル相撲協会は1990年に設立された。相撲会館内にはモンゴル相撲協会の本部があり、同協会会長や理



写真7 B. ツォグトバートル氏（右）へのインタビュー
[アムガランドルジ氏（左）、筆者（中央）]

事の執務室も置かれている。2013年現在の同協会会長は大相撲の横綱・日馬富士関の父の兄弟にあたる人物が務めている。

モンゴル相撲をやる人はレスリングや柔道などでも活躍している人たちで、それまではそうした競技も含めた1つの団体があるだけだったが、これが各競技別に分かれた。相撲は何千年も続いてきたという魅力があり、モンゴル相撲に対する支援者も他のスポーツより多い。このため、モンゴル相撲の競技人口は他のスポーツよりも多く、現在もスポーツ競技人口としては国内トップの位置を占めている。

【話者の属性】

B. ツォグトバートル氏は、インタビュー当時43才（2013年2月20日時点）。モンゴル相撲協会の広報・解説担当理事の要職にあり、同協会ナンバー2の地位にいとされている人物である（写真7）。モンゴルのテレビなどにもよく出演されており、モンゴル相撲の広報活動における中心人物で、マスコミを通じて同氏の顔は国中に知られている。なお、副会長は別にいるとのことである。ツォグトバートル氏自身は体が小さいので、モンゴル相撲は取ったことがないとのことであった。

【ナーダム祭】

既述したとおりモンゴルは行政単位としてウランバートルの他は県・郡・村に分けられるが、毎年夏には国・県・郡を単位にナーダム祭が開催される。開催日はいずれの単位でも同日であり、重複して参加することはできない。ナーダム祭はモンゴルにおける民族の祭典とも呼べるもので、モンゴル相撲（ブフ）・競馬・弓射の3つの競技が実施されている。ナーダム祭に参加できる力士の数は「国」は512人（最大時には1,024人）、21ある「県」は各128人（最大時には256人）、県下の「郡」では各64



写真8 カレンダーの表紙に登場する横綱・白鵬関の父親

人（最大時には128人）が基本である。そして、モンゴル国内には現在、少なくともおよそ3万人以上の相撲の競技人口があるとのことであった。

日本の大相撲には横綱や大関など強さを示す称号があるが、モンゴル相撲も同様である。そして、この称号はナードム祭で勝つことによって得られるもので、ガルダなどの動物名が称号にあてられている。国・県・郡のいずれにおいても称号を得ることが可能だが、国の〇〇、県の〇〇のように区別されている。もちろん、国のナードム祭で得られた称号が最も価値が高く、日本の大相撲で活躍する横綱・白鵬関の父親は国のナードム祭で何度も優勝した、モンゴル相撲史上の英雄の一人とされる。このため、モンゴル相撲のカレンダーの表紙には、いまでも彼が登場することが少なくない（写真8）。

人によっては県や郡のナードム祭で称号を得たいと考える人もおり、そうした称号を得てから国のナードム祭に参加する人もいる。また、若い人で、はじめから国のナードム祭にのみ参加したいと考える者もいるし、国のナードム祭に参加していた人が県や郡のナードム祭に出場することもある。つまり、下のクラスから上のクラスに参加することも可能で、逆に上から下も可能。基本的に参加は自由であり、誰でも参加することは可能なシステムで、特別に推薦が必要ということもない。したがって、国のナードム祭の参加者512人のなかには、国や県での称号を持っている人もいれば、そうでない人もいる。しかし、参加資格があるかどうかは、自身や周囲の判断で暗黙のうちに決まってくるようだ。最近は参加を希望する人が多くなり、定数の512人を越えてしまう場合が出てきたが、そうした際には称号を持っている人を優先的に選ぶようにしている。以前は、参加者の人数が不足する場合は軍隊の兵士を参加させていたこともあった。また、1,024人規模でナードム祭を行なう場合は不足することがあったため、その際には兵士を参加させていた

とのこと。もちろん、兵士から横綱の称号を得た人もいる。

国のナードム祭はウランバートルの中央スタジアム（オープンスタジアム）を舞台に開催される。既述したように国・県・郡いずれの単位も開催日は同日である。しかし、県の何十周年記念日のような特別の機会には、その県出身者に配慮して県のナードム祭の日程をずらして参加者を確保することもある。

大会では、3、5、7回戦は強い称号を持つ人が対戦相手を指名できるシステムになっている。そして、近年は4、6、8回戦はコンピューターで対戦相手を決めるようになった。強い老人がわざと負けて八百長問題になったこともあるという。

なお、ナードム祭では18才以下の大会も同時に開催されている。また、技の種類は1,500種ともいわれているが、一般的なものは代表的な3種である。

【旧正月、その他の大会】

ナードム祭以外、旧正月などでは相撲の大会を同じ日にやることは少ない。県や郡で日程調整しながら開催し、参加者確保の面からも日程をずらしてやるようにしている。ウランバートルでも旧正月は1か月の間に市内で何回も大会が開催されている。大会の規模としてはナードム祭が最大のもので、旧正月の大会はこれに次ぐ規模といえる。旧正月後に開催される次の大きな大会は3月1日にあり、この大会は256人が参加する規模だという。参加者はウランバートルに限定されない大会である。

ウランバートルには東西南北に4つの大きな山がある。年4回、この山の名前をつけた大会が旧正月の大会と同じ規模で開催される大きな大会として位置付けられている。また、大きな会社が支援して256人参加規模の大きな大会が会社の創立何周年記念日などにあわせて開催されたりもする。このような大会がウランバートルでは年間に20回ほど開催されている。そして、規模の小さな大会は1か月に2～3回は行なわれている。各県や各郡でも祝日にあわせて大会を開催したりしているとのことであった。

さらに、軍隊を単位で開催される大会も毎月ある。軍隊での称号は県と同じレベルのものとして認識されている。また、郡単位で開催される大会も同様に毎月開催されている。さらに、相撲に関心を持っているがふだんは仕事をしている一般の人々のための大会も色々と開催されている。こうした大会は幼稚園児から大人までを対象にしている。

【「部屋」のシステム】

相撲を取る人々が県ごとに集合するためのクラブは「部屋」と呼ばれ、この部屋がウランバートルにある。地方からウランバートルに来ている人は、そこに出身者として集合し練習している。

日本の相撲部屋のような施設（建物）を持つ県も1～2か所あるが、それ以外の県は県独自の施設をウランバートルに有していないため、空いているスポーツ施設（体育館やバスケットボールのコートなど）を利用して練習する環境を確保している。ナーダム祭が開催される前には、部屋としての練習キャンプもある。ちょうど今は旧正月の後なので、部屋での練習の参加者は少ないのではとのことであった。

【子どもたちと相撲】

最近のウランバートルの一般家庭の子どもたちのなかには、相撲に興味を持っている子が少なくないとのこと。幼稚園児くらいの段階でも同様である。このインタビューを行なった当日も、会館内の競技場ではウランバートルの幼稚園児を対象にした大会が開催されており、「ニューワールド」というテレビ局が撮影を行っていた（写真9～11）。

こうした背景には、大人を含めたモンゴルという社会全体で相撲に対する関心の高いことがあげられるという。テレビで放送されている影響もあるが、モンゴル相撲で称号を得ている人はみな世間に名前を知られた有名人の立場になることから、子どもたちは相撲を通じ総じて有名人になりたいという希望を持っているという。

幼稚園クラスの大会は毎週開催されており、テレビで放送もされている。相撲のスタイルや所作は大人とまったく同じである。子どものなかには大人と同じように難しい技を使う子もいる。勝者は右手（現在は左手も）をあげ、敗者は帯を解いて下をくぐる。また、勝者からお尻を叩かれる。

【モンゴルと日本の相撲に関して】

日本では相撲に関心を持つ子どもや若者が多くない現状に対し、モンゴルでは相撲に寄せる関心が高いことに関してツォグトバートル氏は、昔からモンゴルでは国民がみなモンゴル相撲（プフ）そのものを、さらにはその歴史をリスペクトしてきたことを挙げる。また、1990年に設立されたモンゴル相撲協会が行ってきた事業もそうした尊敬の対象とする意識を支えているとのことであった。そして、年に何10回も大会が開催され、その賞金が高いことも魅力になって参加者を集めているという。この賞金はスポンサー企業が負担しており、ナーダ



写真9 相撲会館内で開催されていた幼稚園児の大会



写真10 大人顔負けの体さばきをみせる幼児



写真11 成績上位者の表彰式

ム祭に関しては国がスポンサーになっている。また、観戦する客のチケット代金の一部も賞金にあてられている。

最近ではスポーツを専門にする大学もいくつかできた。そこでモンゴル相撲を教えたりもしている。だが、日本のような本格的なプロのシステムはない。にもかかわらず、毎日のように練習している人もウランバートルには600人くらいはいるとのこと。モンゴル相撲のプロ化に関しては、まだ今はその時期ではないという。プロ化するためには強力なスポンサーが必要だが、現在のモンゴルの経済状態では無理だと考えているという。

日本で朝青龍関や白鵬関などモンゴル出身者が活躍していることに関し、この2人はモンゴル相撲であっても



写真12 アディヤバト氏（右）へのインタビュー
[於：フラワーホテル]

活躍して横綱になっていたのではないかと思うとのこと。残念だと考える人もいるし、2人がいればモンゴルでも横綱になって2人の横綱が増えたはずだと考える人も少ないという。朝青龍関も白鵬関も日馬富士関も子ども時代はモンゴルで過ごしたわけだが、日馬富士関は大きな大会ではないが子どもの相撲大会に出て優勝したことがあり、朝青龍関はナーダム祭の子どもの大会で1回優勝した経験を持っているとのこと。白鵬関もナーダム祭の子どもの大会で上位までいったそうである。

また、日本の相撲界で活躍しているのが今はモンゴル人だが、少し前まではハワイ出身者などが横綱や大関になったりしていた日本の相撲界に対して、日本人はどのように感じているのかが気になっているとのことであった。

なお、氏自身は、相撲のスタイルは日本もモンゴルも確かに似ている部分があるが、モンゴル相撲はモンゴル民族の伝統と習慣を集約して体現したものだと考えているとのことであった。そして、日本の相撲のような凶作・豊作を占う神事としての意味はモンゴル相撲にはないということであった。

5. モンゴル相撲の現役力士からの聞き取り調査

今回の調査で通訳をお願いしたアムガランドルジ氏の知人で現役力士の方に筆者が滞在中のホテルに来ていただき、ホテルの部屋でインタビューを行なった。

【話者の属性】

現役力士の名はアディヤバト氏。27才（2013年2月現在）。出身地であるアロハンガ県のナーダム祭で2回優勝（横綱の称号）した経験を持つ人物で、最近10年間は常に大会で上位を占めている有望株である（写真

12)。現在は国のナーダム祭で称号を得ようと頑張っており、近いうちに5回戦までは進みたいと考えているというが、その年の組み合わせの対戦相手次第という部分もあり、なかなか難しいとのことであった。なお、アロハンガ県はウランバートルの西、約400キロメートルに位置する県である。

【力士の体躯】

アディヤバト氏の身長は180センチメートル。体重は113キログラム。この体格は力士の平均よりも下のレベルで、体躯の大きい人は少なくないとのこと。県のナーダム祭で3回優勝している横綱でスクバイルという人は身長2メートルくらいあるという。モンゴル相撲協会会長の息子（日馬富士関の従兄弟）は身長198センチメートルで、ガルダ（準優勝）を1回獲得している。ただ、相撲に体重と身長は関係なく、スリムであっても強い人は強いとのことであった。

【部屋での相撲トレーニング】

お話を伺った2013年2月21日の午後には、アロハンガ県の相撲部屋である「ブッフビルヒト」（同県の相撲部屋の名前）というクラブで練習を行なうという（※見学させていただいた練習状況については後述）。部屋での相撲のトレーニングは午後1時から3時までの2時間で、週3回行なわれている。トレーニングの内容は、個々の技の練習と技を使った相撲の実践練習である。どこからつかんで、どのように取ったらよいのかを、実践的に経験するための練習だという。ここでトレーニングを行なう日以外は、筋力をつけるためにバーベルなどを使用した筋トレを自宅で行っている。

部屋でのトレーニング参加者はナーダム祭が近くなるにつれて多くなり、70人くらいが集まる。ナーダム祭のための準備として、これでチャンピオンとなる。この日は旧正月明けのため、まだ帰省中の人も多く、それほど多くの参加者は集まらないとのことであった。

【力士の年齢】

ナーダム祭で本格的に相撲をするのは14、15才からで、活躍するのは20～35才くらいの年齢。年齢制限はない。白鵬関の父親の時代は60才を過ぎても大会に出ていたが、現在は50才代くらいまでとのこと。旧正月の相撲大会やナーダム祭にはこうした50才代の人も当然参加している。

【アマチュアとしての力士】

自身は小学校に入学してすぐに相撲をはじめたとのこと。アマチュアである。しかし、常に練習していないと上にはあがれないという。このため、今の若者たちは毎

日のようにトレーニングし、1日2～3時間は練習にあて、その他の時間は仕事をしているとのことであった。氏自身は建築関係の仕事についている。

相撲をしている人には警察関係者や公務員が多いという。そして、警察関係にはいくつかの機関があり、そこで働いている人が多いとも。そのなかにスポーツクラブがあって、そのクラブの選手として活動している場合もあるという。

【得意技】

モンゴル相撲の技には「チョッキをつかまないでやる技」「チョッキをつかんでやる技」「相手と組んでからやる技」があり、氏自身はチョッキをつかんでから片手で相手の足を取る技、組んでからの技では足を掛けて倒す技、それと内掛けを得意技としているとのこと。

【相撲の魅力と継承性】

相撲はとても魅力的で、モンゴルでは一番おもしろいスポーツが相撲だと氏は語る。そして、モンゴル相撲をやっている人は国際的なスポーツである柔道やレスリングも同時にやっている人が多いという。

お子さんにも相撲をやらせるのかと伺うと、それは本人が決めることだと言いつつも、テレビでも相撲をはじめとして格闘技をよく放送しているので、その影響はあるだろうとのことであった。また、自身の父や祖父は相撲はやっていなかったという。父方の祖母の親戚には一人だけ相撲をやっていた人がいたとのこと、モンゴル人男性がみな相撲をやっているわけではないとのことであった。

6. アロハンガ県の相撲部屋での練習の観察調査

部屋での練習が間近に迫っていたため、アディヤバト氏へのインタビューは短時間で切り上げ、練習場所へと移動した。

【アロハンガ県の相撲部屋】

アロハンガ県の相撲部屋が置かれていたのはウランパートルにあるモンゴル農業産業省の建物の2階にある体育館であった。外国人が部屋の練習を見学するのは稀なことといわれ、この建物に入る際にはパスポートチェックがあった。

この日の参加者はもちろん全員がアロハンガ県の出身者である。指導者2名がおり、参加者は30名以上であった。それぞれが三々五々、集まってくる状況で、特段に集合時間を気にしている様子はない。

【準備運動】

体育館にはバスケットボールのリングがあり、準備運動を兼ねて、集まった参加者の多くはバスケットボールをして体を温めている。大きな体躯にもかかわらず、みな敏捷な動きをしているのには驚かされる。これは相撲で怪我をしないためだと説明を受けたが、バスケットボールに熱が入り過ぎて指を怪我してしまうことも多いという。

こうしたバスケットボールの準備運動が進むと、体育館の半面以上のスペースに羊毛で作った絨毯が敷かれはじめる（写真13）。相撲の練習はその絨毯の上で行なわ



写真13 若手力士が羊毛の絨毯を敷く



写真14 アロハンガ県の指導者からの指示を受ける部屋の力士たち



写真15 練習前の入念な準備運動

れる。この絨毯を敷くのは若手の役目で、年長者はその様子を眺めている。

バスケットボールで体を温めた後は、およそ20分をかけてストレッチなどの準備運動をさらに念入りに行った(写真14, 15)。なお、モンゴル相撲における取り組みの所作のなかに鷹の羽ばたきを模した舞があるが、これも全員で行っていた(写真16)。

【参加者】

この日は旧正月後最初のトレーニングとのことで、参加者の多くは称号を持たない若者たちである。しかし、



写真16 鷹の羽ばたきを模した舞



写真17 アディヤバト氏の練習風景



写真18 部屋による練習風景

国のナーダム祭で5勝した者も含まれている(写真17, 18)。小さい大会は称号が与えられないため、勝ち負けは基本的に関係ないという。県で上位に入った人たちでも、国のナーダム祭で2~3勝はできても、4~5勝するのは難しいとのことであった。参加者は全員、筋肉質の体躯をしており、日本のように相撲で体重を増やす必要性はないという。

【ナーダム祭の強者たち】

最近2年間はオプス県の出身者が国のナーダム祭で優勝しており、この県は強いという。オプス県には10回優勝した強者がいる。また、日馬富士関の故郷であるゴヒマルタ県も同様に強い力士がいるという。なお、最多の優勝回数12回を誇る力士はヒンティー県出身だが、その人物の父親はアロハンガ県出身とのこと。

アムガランドルジ氏の同級生ラグチャー氏は2012年の国のナーダム祭で準優勝した人物で、ガルーダの称号を有している(写真19)。そして、最近10年間常に上位の位置にいる。ちなみに、昨年優勝したのはシシという名前の22才の若者だった。また、アムガランドルジ氏も同級生も1976年生まれ辰年で、12回優勝した人も辰年生まれとのこと。十二支はモンゴルも日本も一緒であり、モンゴルでは辰年生まれ力士は強いといわれているとのことであった。

なお、対戦する際には挨拶を行なうが、同年齢同士の対戦の場合は左右の腕を上下にし、年齢が違う場合は年上の者は腕を上から、年下のものは腕を下から出すという。

おわりに

ウランバートルの中心部にある中央郵便局には、ツー



写真19 ガルーダの称号を有するラグチャー氏(中央)
[筆者(左), 筆者の息子(右)]

リストのための土産物等のコーナーがあり、なかにはモンゴル相撲関連の書籍や日本の力士の錦絵を表紙にレイアウトした相撲関係と想像される関連書籍も配置されていた。相撲会館にあった書籍同様いずれもモンゴル語のものであったが、国民が相撲に寄せる意識の高さはそこかしこに感じることができた。

本稿冒頭にも記したとおり、今回のレポートはフィールドノートの文字化に過ぎず、内容を整理し、問題点を抽出したうえでその課題を解明する道筋を示したものでない。したがって、例えばモンゴル相撲のセミプロ化に関しても未確認のまま、意見の齟齬もそのまま放置した状態である。今後、こうした点を踏まえつつ追跡・確認調査を行ない、調査の精度を高めるとともに、さらに、筆者自身が掲げる東アジアにおける相撲という力比べの文化のなかで比較検討しながら、モンゴル相撲の事例を相対化していく必要がある。また、これまでの研究成果や関連文献の内容を精査していくことも果たさねばならない課題であろう。今後の再調査結果を踏まえて分析を進めていく所存である。

最後になったが、今回のフィールドワークにあたっては、現地の言語を理解できない筆者のために、忙しい仕事の合間に通訳を兼ねて仲介の労をとっていただいたアマガランドルジ氏の存在なしには聞き書きを進めることができなかった。氏には心より御礼申し上げます。そして、快くインタビューに応じていただいたモンゴル相撲協会理事B. ツォグトバートル氏、アマガランドルジ氏の同級生の現役力士ラグチャー氏、同じく氏の知人のアディヤバト氏にも深謝申し上げます。さらに、この調査を実現するためには不可欠の存在であった神奈川

大学講師・永井匠氏、同氏の友人でありかつアマガランドルジ氏の夫人であるオヨンジャルガル女史、アマガランドルジ氏の弟アマガランバートル氏、ウランバートルのホテルで幸運にもお目にかかり助言を頂戴した日本を代表するモンゴル文化研究者である大谷大学・松川節教授にも厚く御礼申し上げます。また、この調査で撮影・記録等をサポートしてくれた息子の八木橋亮太にも謝意を表しておきたい。

[註]

- (1) 外務省ホームページより転載
(<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/mongolia/> 2015年12月25日取得)
 - (2) バー・ボルドー氏による「ブフ（モンゴル相撲）入門」を参照引用。
(http://mongolbukh.web.fc2.com/bux_intro.html 2015年12月25日取得)
 - (3) 註2に同じ（※ただし、URLは下記）。
(http://mongolbukh.web.fc2.com/bukh_guide/bukh_classification.pdf 2015年12月25日取得)
 - (4) 註2に同じ（※ただし、URLは下記）。
(http://mongolbukh.web.fc2.com/bukh_guide/bukh_comparison.pdf 2015年12月25日取得)
 - (5) 註2に同じ（※URLも同様）。
 - (6) 註5に同じ。
 - (7) 註5に同じ。
 - (8) 註5に同じ。
- ※本稿で使用した写真はすべて2013年2月に筆者と筆者の息子が撮影したものである。

(やぎはし のぶひろ)